

「基礎から学ぼう」シリーズ
講座4 「DLA（外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント）」
質問への回答

櫻井千穂（大阪大学）

講座4に関して、多くのご質問をいただき、ありがとうございました。支援方法に関する質問が多くありましたが、これについては講座4のテーマからはずれるので、愛知教育大学に別の研修の場を設定してもらいましょう。

また、高等学校段階の生徒の言語能力評価に関する質問もありましたが、あくまでもDLAの対象は言語形成期にあたる小中学校段階の年齢の子どもたちです。DLAは、言語形成期を複数言語環境で育つ子どものバイリンガル教育理論をベースに開発されていますので、高等学校段階の生徒の言語能力評価に安易に応用するのは望ましくありません。高等学校段階の評価に関しては、文部科学省も外国人児童生徒等教育の今後の課題の一つに位置付けていますので、ここで言及することは控えます。

では、以下にカテゴリー別に質問にお答えします。

1. DLAの実施方法

Q1. 時間等に限りがあった場合、DLAを複数人同時にすることは可能でしょうか。

→A1. DLAが「対話型」であることを重視しているのは、子どもが「できないこと」や「持っている知識」だけを調べようとしているのではなく、一対一のやりとりを通して、子どもが課題に取り組む「プロセス」をじっくり観察し、「どんな支援を得て、何ができるのか」という情報を得るためです。よって複数人同時に実施されることは想定されていません。

Q2. DLAは一人の実施者（教師等）が一人の児童のアセスメントを行うのでしょうか。例えば、一人の実施者が<話す>を行い、別の実施者が<読む>を行う様なことはありますか。また、DLAを複数で評価することについて、くわしく教えてください。

→A2. 一人の実施者がDLAを行ってもいいですし、複数の実施者の間で実施方法について

十分に共通理解がはかれ、実施中のビデオ等を見ながら評価を一緒に行うのであれば、実施者が複数いても問題ないと思います。より重要なのは、DLAを誰が実施するかということよりも、その結果（数値ではなく、DLAの過程で観察された子どもに関する所見）を、できるだけ支援に携わる全ての人で共有し、支援についての共通理解を得ることです。私が支援に関わっている教育現場では、日本語指導担当者だけでなく管理職や担任も含め、支援に関わる人々でケース会議を開き、DLAをやっているビデオを見ながら、支援方針を確定させることが多いです。評価をどうしても一人でやらなければならない場合には、上述の通り、結果を数値で提示するのではなく、観察された子どもの所見をできるだけ詳しく、記述式で示し、周囲と共有することが重要かと思います。

Q3. 小学生（とくに低学年）は普段から慣れ親しんでいる間柄か、ふざけてしまい、きちんと診断することができません。わかっているのにわからない！と言ったり、文章も読みたくない！やりたくない！と拒否されたりして、なかなかうまく進みません。どうしたらいいでしょうか。

→A3. DLAは一对一の対話型であるために、普段の関係性が反映されてしまって、それがメリットに働く場合もあれば、ご相談のケースのようにデメリットとして働く場合もありますね。具体的なやりとりを拝見していないため、一般的なことしかお答えできませんが、例えば、普段支援を担当している人とは別の人が実施したり、やり始める前に目を見てゆっくり趣旨（目的）を伝える、話し方を普通体からデスマス体に切り替えるなど、「普段とは違う」という空気感をしっかり作ることも一つでしょう。強制的に実施しても子どもが本来の力を発揮することはできないでしょうから、（子どもの心の）準備ができるまでDLAをやらぬことも一つかと思います。

Q4. 母語支援の語学相談員の方が、学校の先生方からよく「母語ではなく日本語のDLAを頼まれる」とおっしゃっています。日本語のDLAは子どものいろんな側面を見るという観点から学校の先生方が行い、母語の方だけ語学相談員の方にお問い合わせたらどうかと思うのですが、いかがでしょうか。

→A4. ご提案されている方法が理想的だと思いますし、私も教育現場ではそのようにアドバイスしています。

Q5. DLA<話す>の「友達を誘う」の「会話をしめくくる」や、「消防車」の役割や違いについて、話すことができる児童があまりいません。これらのタスクは、対象児にとって難しい課題ではないでしょうか。

→A5. DLA<話す>の課題の設定は、数百人のJSL児童生徒及び日本語母語児童生徒へのパイロット調査を経て設定されています（「友達を誘う」のタスクは、OBC（Oral Proficiency

Assessment for Bilingual Children, カナダ日本語教育振興会 2000) で使用されているタスクですから、実際の実施人数はもっと多くなります)。ですので、どの児童も達成できないほど難しいものというわけではありません(ステージ6、5に判定される児童でしたら答えることが可能です)。ただ、DLAは日本語能力だけを測っているのではなく、子どもの対人関係調整能力や学習言語能力に必要な認知面の力も測っているので、日本語の流暢度が高いからといって必ずしも全てのタスクができるわけでもありません。「消防車」のタスクは小学1年生であれば、日本語母語話者の子どもでも役割には言及せずに、形状の違いや類似点を述べる子どもも少なくありません。

尚、本冊に書かれているように、認知タスクは全てを実施するのではなく、子どもに応じて選んで使用しましょう。

2. DLA の評価・診断方法

Q6. JSL 評価参照枠〈全体〉のステージを決定する際は、どのように判断したらよいでしょう。

→A6. 子どもの言語能力は、一般的に、聞く(聴く)→話す→読む→書くの順で伸びます。

JSL 評価参照枠〈全体〉は、特別の教育課程(つまり取り出し指導)の対象になるかどうかという観点から活用されることが多いですが、ステージ5、6は教科学習言語能力を獲得できている段階で、特別の教育課程の対象となる児童生徒はステージ4までです。その文脈で考えると、〈読む〉〈書く〉のステージを中心に捉え、〈聴く〉〈話す〉のステージに関しては参考情報として考えると、より子どもの現実を反映した支援につながると思います。具体例を示すと、滞日期間が長くなると、〈話す〉のステージは5になっても、〈読む〉〈書く〉のステージが4のままの子どもが多くいます。このような子どもの場合の全体のステージは4として考え、特別の教育課程の対象として適切な支援をする必要があります。

Q7. 私の地域では、日本語教室で学期ごとに成績表を作成し、保護者にお渡ししているのですが、その中に所見の他に DLA の評価をもとに作成したグラフ・数値を載せることになっています。(「ことば・話す・読む・聴く・書く」の領域で数値を出しています。) DLA で出た数値を保護者または児童生徒に向けての評価として提示することに関して、どう思われますか。

→A7. どのように数値を算出されるのかわからないので一般的なことしか言えませんが、講義の中でもお話ししたように、DLA の診断シートの評価基準の5:とてもよい、3:ふつう、1:もう少し、は順位尺度であって間隔尺度ではないのと、診断シートは JSL 評価参照枠のステージを確定するためのプロセスで活用するためのものなので、その数値を保護者や子どもに提示することには意味がないと思います。一方で、JSL 評価参照枠の記述文と一緒に

にステージを提示するのであれば、一つの目安にできるでしょう。

ただ、個人的には、この JSL 評価参照枠の記述文は年齢別に書かれていませんし、現段階では不完全なものだと思っています。次の質問にも関連しますが、指導・支援者および子どもや保護者が現在地を確認できたり、目標とできるような子どもの実態を捉えた記述文が必要だと思います。

Q8. DLA 開発に携わられた研究者のグループで、その後、DLA の精緻化の研究が進められていると聞きましたが、その結果がどこかで見られるようであれば教えていただけますか。また、中学年・高学年を評価するとき、具体的にどんなことに考慮する必要があるか教えていただけますか。

→A8. 現在、科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 21H00538「文化的言語的に多様な子どもの教育のための汎用的言語能力の参照枠の構築」(2021 年～2026 年)にて、年齢枠別の評価参照枠の記述文の作成が進められており、数年のうちに結果がまとめられると思います。

また、DLA<読む>に関しては、その前身となる「対話型読書力評価」(中島和子・櫻井千穂, 2012)の開発のための調査研究のまとめとして、年齢枠別の「読書力の発達段階」を示した記述文を作成しました。ここでは、小学1年生、小学2年生、中学年、高学年、中学生といった年齢枠別に評価の視点を示しています。ご興味を持ちの方は、『外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力』(櫻井千穂, 2018, 大阪大学出版会)の pp.260-271 に掲載されていますのでご参照ください。

3. DLA の複数言語評価への応用

Q9. 日本語で DLA をやっている最中に、母語を使って、質問しなそうかと悩んだりします。それは可能でしょうか。

→A9. アセスメントの最中にバイリンガル実施者が母語も活用しながら評価をするやり方は、「トランスランゲージングを活用した評価」と言われますが、このやり方は、まだ世界でも十分な研究が進んでおらず、確立していません。個人的には、(講義の中でお話ししたように)子どものバイリンガル ZPD を測れるように複数言語で適切なスキュアフォールディング(声かけ)を行う必要があると思いますが、そのためには、一つの言語でできることの上限をしっかりと見極めてから、もう一つの言語を活用するなど、それぞれの言語でできることがわかる手順を踏む必要があるでしょう。その手順を示すには、もっと基礎研究が必要だと思います。

Q10. DLA を母語で実施することはできますか。

→A10. 現段階では、(DLA 実施者が子どもの母語で DLA を実施できるほどの言語能力を持ち合わせている人であれば)、<はじめの一步>と<話す>と<書く>は、タスクの細かい点での微調整が必要ではありますが、本冊を翻訳して使用することで、ある程度、実施可能です。2022 年 2 月 12 日 (土) に多言語 DLA (中国語、ポルトガル語、スペイン語、ベトナム語、フィリピン語、ロシア語、英語、日本語) のワークショップを実施し、これらの言語の<はじめの一步>と<話す>の翻訳版を次の URL で公開しています。興味をお持ちのかたはご参照ください。

<https://www.dla-kaken.jp/>

なお、<読む>と<聴く>は、母語のテキストや課題 DVD がないので実施できません (DLA で使っている日本語のテキストや DVD を翻訳すればいいというわけではありません)。